

＝文学コンクール作品講評＝ 牧野節子

ひとつの作品を書くということは、自身の「思い」を刻む行為であり、その思いを読み手に「伝える」行い（おこない）でもあります。

今回、最終選考に残ったどの作品にも、書き手である作者の真摯な「思い」が込められているのを感じ、心を打たれました。

私が特に心ひかれた作品は「虹色！！ オンリーワン☆」です。フィクションであっても、登場人物が「本当に生きている」と思える作品がよいのは当然のことですが、そういった意味で「虹色～」は、主人公理恵の体温が感じられ、リアリティのある物語でした。

主人公の行動の動機や、背景にある事情といったものが曖昧で希薄な物語は足下がぐらつきやすいのですが、この作品はそれらがきちんと書かれているので安定感があります。理恵の、親友一鈴への気持ちが素直に表現されていて共感を呼びやすく、ラストもあたたかく読後感がよい作品でした。ただ、もう少し読点を増やしたほうが読みやすくなります。

「レインボウどろっぷす。」は、父親の転勤のためイギリスと日本に離れてしまった幼馴染みの少年二人の心を描いた物語。「金色の雨の中にぐるりと首を巡らせて」「時間の隔たりの中に落とされた声」「寝不足の身体には効き過ぎる太陽」など、きらりと光る描写が印象的な、透明感のある作品でした。少年二人の日本でのエピソードをあと幾つか入れると、離れた二人の心情が、もっと現実味のあるものとして伝わってくるでしょう。

文章力が抜群だったのは「忘却の系譜」です。とはいえ、登場人物の設定が甘く、構成に無理があり、ストーリーの進め方が強引、と欠点の多い作品でもあります。しかし、「時」「生と死」「愛」といった、人生の根源的なテーマに真っ向から取り組もうとしている作者の姿勢に、魅せられました。この作者の別の作品も読んでみたいと思いました。

さて、「伝える」という意味においては、どの作品も少々力不足のところはありましたが、書く技術は、今後多くの経験を積み、優れた本を読み、書くことを重ねていけば、確実にステップアップしていくはずです。

いちばん大事なのは、熱い心を持ち続けることだと思います。どうか皆さん、いまの真摯な「思い」を大切に胸に抱（いだ）いて、これからも書き続けてください。